

## 中年女性の幻覚妄想状態 (第3報)

### —— 憑依体験 ——

浅野 弘毅, 近藤 等, 東 雅晴

#### はじめに

中年女性に好発する妄想としては、①被害妄想、②嫉妬妄想、③憑依妄想などが報告されている。これまで筆者らは、①と②について退行期妄想症<sup>1)</sup>および性愛を主題とする妄想<sup>2)</sup>として取り上げ、女性のライフサイクルにおける中年期の特性に着目しながら検討を加えてきた。

今回は、憑依体験を取り上げる。従来の用語法では憑依妄想という言い方が一般的であるが、憑依は人格変換や意識の変容をとともなう現象であり、「妄想」の枠におさまりに切れない症状を含んでいるので、あえて「体験」とした。

はじめに、憑依妄想の研究史を簡単に振り返ってみる(表1)。Kraepelinは『臨床講義』のなかで、憑依妄想を呈した感応精神病について取り上げ<sup>3)</sup>、Baelzは、日本で経験した孤憑きについて報告している<sup>4)</sup>。Henneberg<sup>5)</sup>、Kehrer<sup>6)</sup>、Jacobら<sup>7)</sup>は、わが国の祈禱性精神病に類似した症例を報告している。Freudの論文は、画家 Heitzman についての病跡学的研究である<sup>8)</sup>。Oesterreichは、憑

依状態に、夢遊病型と妄想型とを区別した<sup>9)</sup> 国外では、人格変換に関する Yap の論文<sup>10)</sup>以降は、とくにめばしい研究は見当たらない。

わが国では、この領域の研究は多数にのぼり、枚挙にいとまがないほどである。代表的なものを表2に示す<sup>11-25)</sup>。島村の調査<sup>11)</sup>を嚆矢とする。森田は、加持祈禱あるいはそれに類似した事情から人格変換、宗教妄想、憑依妄想などを呈する病態を祈禱性精神病 (Invokationspsychose) と名づけた<sup>14)</sup>。

村上は、51歳の女性例をあげ、祈禱性精神病は心因性要素の顕著な変質性精神病であるとした<sup>17)</sup>。荻野は、憑依状態を精神病理学的に考察して、心的緊張が低下する結果、統一的人格が保持されず、副意識が主人格を支配するにいたると考えた<sup>18)</sup>。久場は、憑依症候群は現代文化とシャーマン文化の接点において出現する社会文化的現象であるとした<sup>21)</sup>。最近、大宮司<sup>24)</sup>と高畑<sup>25)</sup>が相次い

表1. 〔憑依妄想〕研究史 (国外)

1900 Kraepelin, E.	induziertes Irresein
1906 Baelz, E.	Besessenheit und verwandte Zustände
1919 Henneberg, R.	mediumistische Psychose
1922 Kehrer, F.	spiritische Psychose
1923 Freud, S.	Teufelsneurose in siebzehnten Jahrhundert
1924 Jacob, C., Meyer, G.	spiritistische Psychose
1929 Oesterreich, T.K.	Possédés
1960 Yap, P.M.	possession syndrome

表2. 〔憑依妄想〕研究史 (国内)

1892 島村	島根県下狐憑病取調報告
1900 荒木	徳島県下の犬神憑及狸憑
1902 門脇	狐憑病新論
1915 森田	祈禱性精神病
1938 内村	イムの研究
1940 田村	満洲の邪病
1943 村上	憑依状態の心的構造
1950 荻野	憑依状態の精神病理学
1959 新福	山陰地方の狐憑さ
1967 佐々木	巫女の研究
1973 久場	憑依症候群の社会文化精神医学的研究
1976 西村	シャーマニズムと憑依状態
1979 吉野	祈禱性精神病
1993 大宮司	憑依の精神病理
1994 高畑	憑依と精神病

でモノグラフを著した。

以下に、閉経の前後に憑依体験を呈した3症例について提示し、中年女性とりわけ主婦の心性との関連について考察を加える。

## 症 例

〔症例1〕 初診時48歳の主婦。

(1) 高等小学校卒。22歳で結婚。姑との折り合いが悪く、何回か嫁ぎ先を飛び出した。夫は結婚当時酒を飲まなかったが、10年位前から飲酒を始め、酔うと本人に暴力を振るうようになった。子ども2人は独立し、夫との2人暮らし。

(2) 病前性格は、小心で頑固、我が強い。些細なことを気にかける。依存的。昔から信心深いところがあり、8年前にS教に入信。

(3) 47歳より生理不順。

(4) 本人48歳の時、相談相手になっていた次男が、遠隔の地に転勤した。夫との仲が旨いかわず、酔って乱暴されるため、不眠がちとなり、神経がすり減っていた。夫とは別れるつもりで荷物をまとめたりもした。

(5) ある日、突然、「狐がきた」「そこにいる」と騒ぎ出し、夜も眠らず、食事もとらなくなった。TVにも人間が狸や狐になって出てきて「離婚しろ」とか、「嫁家先から出れば幸せになる」と教えてくれる。S教に入ったことを夫に反対され、本尊を燃やした「たたり」で、狐がいたずらしている。別の宗派で拜んでもらったら、先祖が仏様を粗末にした「たたり」と言われた。神様と神様の衝突だともいう。

(6) 初診時、宗教的異常体験、幻視、幻聴を認め、さらに入院時には夢幻様状態を呈し、後に健忘を残した。

本症例は、夫からの暴力が持続的にあり、不眠のために心身が疲弊していた状況で、頼りにしていた息子の転勤が契機になって憑依状態を呈したものである。元来が信心深く、新興宗教に入信していたという事情も背景にあった。

〔症例2〕 初診時、54歳の主婦。

(1) 実母は27歳で死亡。4人兄弟の第2子。中学卒。義母は健在で、異母弟が1人いる。23歳で結婚。子ども2人は独立し、夫との2人暮らし。37歳の時に引越し。息子が分裂病で、精神科に入院歴がある。

(2) 病前性格は、勝気、おおらか。R教の熱心な信者。

(3) 50歳で閉経。

(4) 43歳から生霊(本人の言。実際は死者の霊である)にとりつかれるようになった。生霊が耳に囁き、本人の口を使って勝手に喋り出した。拌み屋さんを5~6ヶ所転々とした。53歳頃から、生霊が悪さをするようになった。「眠られないように邪魔してやる」等という。

(5) 初診時「生霊にいろいろなことを話しかけられる」「生霊が自分の口を使って勝手に喋らせる」「寝ようとすると、体をガバッと起こされ、全く寝せて貰えない」「金縛りにされる」等と訴え、早口でまくしたてる。突然両手を激しく振るわせ、首を振り、奇妙な仕種を繰り返す。失神様発作も認める。拌み屋さんを、あちこち回り歩いて、生霊の正体が分かった。近所の4歳で死んだ子どもの霊だったという。

憑依(同時的二重人格)、幻視、幻聴、舌語り(Zungenreden)、作為体験、不随意運動などが認められた。

(6) その後、R教に行くのをやめた。自分のように靈感の強い人間は、行かない方が良く気がついた。勧められて、死んだ子の墓参りを3度した直後は、嘘のように楽になった。しかし、服薬を中断すると、生霊の力が強くなって苦しめられる、と述べる。

本症例は、複雑な家庭環境に育ち、引越しと息子の精神病という心労が重なった後に、死者の霊にとり憑かれるようになったものである。新興宗教から遠ざかることと薬物療法によって落ち着いたが、服薬を中断すると憑依状態が再燃する。

〔症例3〕 初診時、53歳の主婦。

(1) 3歳の時、一家でパラオに移住し、酪農を

営んだ。5歳の時、母が爆撃にあい死亡。終戦と同時に、一家は日本に引揚げ、開拓村に移住した。同胞7人中の6番目。異母妹が1人。長姉が37歳で自殺。中学は中退。19歳で結婚。28歳の時、夫の弟が家業の農業を継ぐことになったため、一家で上京した。子どもは5人で、夫と末の息子の3人暮らし。

(2) 病前性格は、明朗、大雑把、気かけやすい、温和。

(3) 50歳で閉経。

(4) 50歳の時、社員旅行から戻った直後から、電車の中で変な目で見られ、通勤の途中で学校に通う生徒達が悪口を言うようになった。会社の若い人が自分のことを悪く言う。たとえば、更衣室で、若い女性社員が「パパアが何着ているんだ」「同じ服ばかり着てるんじゃないか」などと言うのが聞こえた。夜間の不眠があり、玄関を何度も確認したり、戸締りを気にする。「オバケが御飯を食べている」と奇妙なことを口にしたり、「鬼」にお辞儀をしたりする。娘たちが心配して、田舎の拝み屋さんで拜んでもらったら、蛇の祟りと言われた。それ以来「お腹に蛇が入っていて、操られている」

表3. 症例一覧

	1	2	3
病前性格	小心、頑固、我が強い、気かけやすい、依存的、信心深い	勝気、おおらか、信心深い	明朗、大雑把、気かけやすい、温和
家族構成	夫のみ	夫のみ	夫と末の息子
宗教的背景	S教信者	R教信者	(-)
発病年齢	48歳	43歳	50歳
閉経	47歳	50歳	50歳
誘因	夫の暴力 子どもの独立	引っ越し 息子の病気	社員旅行 祈禱師の暗示
症状	宗教的異常体験 夢幻様状態 幻視・幻聴 精神運動興奮	憑依(生霊) 幻視・幻聴 作為体験 不随意運動	憑依(蛇) 幻視・幻聴 被害妄想 独語
経過	急性発症 反復経過	急性発症 慢性経過	急性発症 慢性経過

と言い出した。

(5) 初診時、動物(蛇)憑依、幻視、幻聴、被害妄想、独語などが認められた。

(6) 薬物療法により、奇妙な言動も減り、睡眠障害も改善したため、再びもとの暮らしに戻った。

本症例は、戦争を挟んで苦難続きの前半生を送り、十分な教育も受けられず、家庭環境も複雑であった。閉経期にいたって、社員旅行を契機に、被害妄想が出現し、祈禱師の暗示によって蛇憑依を呈した(表3)。

#### 〔症例のまとめ〕

ここで、3症例の特徴をまとめてみるとつぎのとおりである(表4)。

(1) 病前性格は、我が強い、気かけやすい、依存的、勝気、明朗、大雑把という点で共通しており、広義のヒステリー性格といえる。

(2) 教育水準は、高小卒、中学卒、中学中退といずれも低い。

(3) 宗教的背景としては、病前より信心深い傾向があり、本人が新興宗教を信仰していたり、家庭や地域に俗信的雰囲気がある。

(4) 発病状況としては、夫婦の不和、子どもの病気など長期にわたる家庭内葛藤が続いている。

(5) 発病年齢は、40代～50代で閉経期と重なっている。

(6) 誘因としては、不眠や過労などの心身の疲弊と加持祈禱による暗示をあげることができる。

(7) 発症は急激で、時期を特定することができ

表4. 症例の特徴

- |                            |
|----------------------------|
| (1) 病前性格：広義のヒステリー性格        |
| (2) 教育水準：低い                |
| (3) 宗教的背景：信仰または俗信的雰囲気      |
| (4) 発病状況：家庭内葛藤             |
| (5) 発病年齢：40代～50代(閉経期)      |
| (6) 誘因：心身の疲弊・祈禱師の暗示        |
| (7) 発症：急性                  |
| (8) 病像：宗教的異常体験・憑依・夢幻様状態・幻覚 |
| (9) 経過：反復性または慢性            |

る。

(8) 病像は、宗教的異常体験、憑依、夢幻様状態、幻覚などを呈し、精神運動興奮や不随意運動などをともなう例もある。

(9) 経過は、反復性ないし慢性であり、一過性ないし短期間に治癒しえた例はない。

## 考 察

### 1. 退行期妄想症および性愛妄想との対比

憑依体験の認められた3例を、第1報<sup>1)</sup>および第2報<sup>2)</sup>で報告した退行期妄想症および性愛妄想と対比してみると、つぎのような違いが認められる(表5)。

(1) 病前性格が、退行期妄想症では敏感性格、性愛妄想では循環気質であるのに対して、憑依体験ではヒステリー性格である。

(2) 発病状況が、退行期妄想症では対人的孤立、性愛妄想では夫婦間の愛情の希薄化であるのに対して、憑依体験では持続的な家庭内葛藤である。

(3) 発病年齢は、性愛妄想では30代後半から50代前半と幅があり、閉経期に集中しているわけではないが、退行期妄想症および憑依体験では、40代から50代で、閉経期と重なっている。

表5. 退行期妄想症・性愛妄想との対比

	退行期妄想症	性愛妄想	憑依体験
病前性格	敏感性格	循環気質	ヒステリー性格
発病状況	孤立	夫婦関係の希薄化	家庭内葛藤
発病年齢	閉経期(50歳前後)	30代後半～50代前半	40代～50代
誘因	喪失体験	対人関係の拡大	心身の疲弊 祈禱師の暗示
発症	急性	緩徐	急性
病像	被害妄想	不実疑惑 嫉妬妄想 被害妄想	宗教的異常体験 憑依 夢幻様体験 幻覚
経過	妄想発展・人格変化を欠く	妄想発展・人格変化を欠く	反復性または慢性

(4) 誘因が、退行期妄想症では喪失体験、性愛妄想では対人関係の拡大であるのに対して、憑依体験では心身の疲弊および加持祈禱による暗示である。

(5) 発症は、性愛妄想では緩徐であるが、退行期妄想症および憑依体験では急性である。

(6) 病像は、退行期妄想症では被害妄想が中心、性愛妄想では不実疑惑、嫉妬妄想が中心で、それに被害妄想が加わる。それに対して、憑依体験では宗教的異常体験、憑依、夢幻様体験、幻覚が中心で、精神運動興奮と不随意運動が加わる場合もある。

(7) 経過は、退行期妄想症および性愛妄想では妄想の発展を認めるが、人格変化を欠くという点で共通しているのに対して、憑依体験では反復性または慢性である。

(8) その他に、憑依体験の症例では、教育レベルが低いことと、本人が新興宗教の信者であるか周囲に俗信的雰囲気があり、宗教的背景が存するという特徴がある。

このように、退行期妄想症、性愛妄想、憑依体験は、それぞれ臨床的に異なる特徴を有している。

### 2. 憑依体験の臨床像

何者かによって憑かれていると、自分または他人から考えられている状態が憑依と定義される。憑依現象は、社会的に望ましい憑依と、社会的に望ましくない、病的とされる憑依とに分けられるという<sup>26)</sup>。憑依の中核にあるのは、① 人格変換、② 憑依者の神秘的ないし宗教的性質、③ 内的異常体験による言動の異常である<sup>24)</sup>。

宮本は、憑依に(1)神仏や祖霊、人間霊による憑依と、(2)動物霊による憑依(いわゆる憑きもの)を区別し、近年、動物霊の憑依事例が減少していることを指摘している<sup>27)</sup>。われわれの第3例では蛇憑依がみられたが、蛇憑きは、狐憑きに次いで多いとされているものである。東村は、心的緊張の低下にともない、われわれの魂の中に沈んでいる原始心性が自生的に浮き上がって、蛇憑依が出現すると述べている<sup>28)</sup>。吉野によれば、蛇は、古代のひとつにとっては信仰の対象であった

が、時代が下がるにつれ、神威を喪失し、「依り憑く」という働きだけが残り、忌み嫌われるようになったという<sup>29)</sup>。

久場は、憑依の様式を3型に分類した。すなわち、I型は、人格変換をとまなう典型的継時的二重人格、II型は、憑依人格が主人格の内部に定位されて、憑依妄想、幻覚、不随意運動、意識変容をとまなう同時的二重人格、III型は、狭義の憑依に至らないが、幻視、幻聴などの宗教的異常体験を呈するものである<sup>21)</sup>。彼の分類にしたがえば、われわれの第1例はIII型、第2例と第3例はII型ということになる。

憑依は、わが国では女性、とりわけ中年女性に多いとされている。たとえば、高畑らの報告では、52例中女性が38例で、そのうち16例が中年女性となっている<sup>25)</sup>。桜井は、祈禱性精神病が40歳以上の更年期、初老期の女性に多いのは、深刻な社会的、家庭的、個人的苦悩が、この年代に多いことが原因であるとした<sup>30)</sup>。

家族の病気、夫婦不和、家計困難などの出口のない家庭内葛藤が続いている状況<sup>23,24,32)</sup>で、不眠や過労などの心身の疲弊や加持祈禱による暗示<sup>23,32)</sup>などが契機となって出現するという諸家の指摘は、われわれの症例にもあてはまる。

病前性格としては、ヒステリー性格ないし執着性格が指摘されており、教育水準の高くない、被暗示性の高い者にみられる<sup>22,24,31)</sup>。われわれの症例の場合、全例がヒステリー性格で、教育水準も低かった。李は、患者群に共通する特徴として、一般的に社会的に未成熟な傾向と、相対的にreaktiv labilな点をあげている<sup>32)</sup>。

3症例とも、反復性ないし慢性の経過をたどっており、森田の祈禱性精神病<sup>14)</sup>とは異なる経過を示した。心因性に発症しているという点では共通しているものの、われわれの症例の方が、より精神病的といえるかもしれない。

### 3. 窮地からの脱出

憑依は、窮地に立たされた人間が、人格の変換ないし自我の解離を行って、困難な現実からの脱出(Ekstase)を図ろうとするものである。

石福は、〈窮地〉は単なる〈窮した状況〉ではなく、新たな実存が展開される分岐点であるとした<sup>33)</sup>。昼田によれば、「巫病、あるいは宗教体験の獲得も、窮地におちいった人間が示す、1つの防衛反応である」という<sup>34)</sup>。

新福は、憑依には、苦しい現実の否定とそれからの脱出の欲求が認められると指摘しており<sup>19)</sup>、荻野も「困難な現実からの逃避の傾向」<sup>18)</sup>について論じている。

一方で、憑依は不幸の原因を説明する心的装置でもある。文化人類学者の吉田は、憑依は社会統制の機能を持つとともに、病氣、不幸、死の原因について説明を与える働きを持つと述べている<sup>26)</sup>。

高畑は、憑依における自己所属感の欠如に着目し、憑依という自己の意志に基づかない精神・身体的現象によって、自己の責任による現実との対面を避けているとした<sup>25)</sup>。

佐藤は、憑依の生成の契機として、現実世界における困難、不安、葛藤からの脱出願望があげられるとし、世界内存在である個人が、世界を変えるか、あるいは自己という存在自体を変えることを、一挙的になし遂げるのが憑依であると解釈している<sup>31)</sup>。

また、宮本は、憑依の存在するところでは、つねに自我拡大(Ich-Erweiterung)の過程が認められ、「自我が他者を包摂することによって一種の安定に達するという効果をもつかぎり、日本的な防衛機制の1つ」であると述べている<sup>27)</sup>。

性別役割分業の規範によれば、家族成員の心の安定と体の健康を管理する義務は、外で働く男ではなく、内で働く女=主婦にあるとされている<sup>35)</sup>。井桁は、「家族共同体が危機状況に陥ったとき、共同体に備わった自己治癒機能を発動させ回復させること、まず自らが治癒機能を担う癒し手となること、それが主婦の使命となる」<sup>35)</sup>と述べている。

その聖なる勤めを果たすことが出来なくなった中年女性は、困難な課題を克服するかわりに、原始的な防衛機制を用いて、自己を変化させ軋轢を緩和する。茂田は、閉経期における生理的・心理的变化は種々の反応への閾値を下げ、くわえて疾

病・疲労・生理的変調は、外界の認知の障害と曲解の傾向さらには妄想様把握を起こしやすくすると指摘している<sup>36)</sup>。

本人および家族や地域の文化的古層に宗教や俗信が横たわってあれば、そこに憑依が出現すると考えられる。

### おわりに

閉経期に至って憑依体験を示した3例について報告した。第1例は、宗教的異常体験・夢幻様状態・幻覚・精神運動興奮を示し、第2例には、「生霊」憑依・幻覚・作為体験・不随意運動が認められ、第3例には、蛇憑依・幻覚・被害妄想・独語が認められた。

3例に共通する特徴としては、病前性格が広義のヒステリー性格で、教育水準が低く、本人が新興宗教を信仰しているか家庭・地域に俗信的雰囲気があった。長期にわたる家庭内葛藤を背景に、心身の疲弊や加持祈禱を契機に急性に発症し、反復性ないし慢性の経過をたどった。

すでに報告した退行期妄想症および性愛を主題とする妄想と比較し、3者の異同を明らかにした。さらに、症例の臨床像と過去の文献記載との対比を試みた。

そのうえで、憑依体験は、窮地に立たされることの多い中年女性とりわけ主婦が、文化的古層に潜む原始的な防衛機制を用いて、窮地からの脱出を図ろうとするものである可能性について論じた。

(本論文の要旨は、第49回東北精神神経学会総会(1995年10月1日、仙台)において発表した。)

### 文 献

- 1) 浅野弘毅 他：中年女性の幻覚妄想状態(第1報) — 退行期妄想症再考 —。仙台市立病院医誌 **14**, 3-10, 1994.
- 2) 浅野弘毅 他：中年女性の幻覚妄想状態(第2報) — 性愛を主題とする妄想 —。仙台市立病院医誌 **15**, 25-31, 1995.
- 3) Kraepelin, E. (西丸四方 他訳)：クレペリン精神医学臨床講義。p 238, 医学書院, 東京, 1979.
- 4) 安井 広：E. ベルツの「憑依と類似状態について」。日医史誌 **30**, 122-129, 1984.
- 5) Henneberg, R.: Mediumistische Psychosen. Berl. Klin. Wschr. **37**, 873-875, 1919.
- 6) Kehrer, F.: Über Spiritismus, Hypnotismus und Seelenstörung, Aberglaube und Wahn; Zugleich ein Beitrag zur Begriffsbestimmung des Hysterischen. Arch. Psychiat. Nervenkr. **66**, 381-438, 1922.
- 7) Jacob, C. et al.: Über Spiritismus und Psychose. Arch. Psychiat. Nervenkr. **72**, 212-236, 1924.
- 8) Freud, S. (高橋義孝訳)：17世紀のある悪魔神経症。フロイト著作集 **11**. p 102, 人文書院, 京都, 1984.
- 9) Oesterreich, T.K.: Possession. New York Univ. Press, New York. 1966. (Trethowan, W. H.: Exorcism; A psychiatric viewpoint. J. Med. Ethics **2**, 127-137. 1976. より引用)
- 10) Yap, P.M.: The possession syndrome; A comparison of Hong Kong and French findings. J. Ment. Sci. **106**, 114-137. 1960.
- 11) 岡田靖雄：孤憑き研究史 — 明治時代を中心に —。日医史誌 **29**, 368-391, 1983.
- 12) 岡田靖雄：憑きものと精神病者。南博編：近世庶民生活誌 ⑩ 病氣・衛生。p 9, 三一書房, 東京, 1995.
- 13) 門脇真枝：孤憑病新論。東京博文館, 東京, 1902.
- 14) 森田正馬：余の所謂祈禱性精神症に就て。神経学雑誌 **14**, 286-287, 1915.
- 15) 内村祐之 他：あいぬノいむニ就イテ(あいぬノ精神病学的研究, 第1報)。精神経誌 **42**, 1-69, 1938.
- 16) 田村幸雄：満州国における邪病(Hsieh-Ping) 鬼病(Kuei-Ping) 巫医(Wui) 及び過陰者(Kuoyin-che), 並びに蒙古のピロンチ, ライチャン及びボウに就いて。精神経誌 **44**, 40-54, 1940.
- 17) 村上 仁：憑依状態について。村上 仁：精神病理学論集 **I**. p 227, みすず書房, 東京, 1971.
- 18) 荻野恒一：憑依状態の精神病理学的考察。脳研究 **6**, 115-134, 1950.
- 19) 新福尚武：山陰地方の狐憑きについて。精神医学 **1**, 83-90, 1959.
- 20) 佐々木雄司：我国における巫者(Shaman)の研究。精神経誌 **69**, 429-453, 1967.
- 21) 久場政博：憑依症候群の精神病理学的ならびに社会文化精神医学的研究。精神経誌 **75**, 169-186, 1973.

- 22) 西村 康：南部地方の憑依症候群をめぐる文化精神医学的研究。精神医学 18, 1261-1269, 1976.
- 23) 吉野雅博：憑依と信仰儀礼 — 祈禱性精神病から —。臨床精神医学 8, 1015-1021, 1979.
- 24) 大宮司信：憑依の精神病理 — 現代における憑依の臨床 —。星和書店，東京，1993.
- 25) 高畑直彦 他：憑依と精神病 — 精神病理学的・文化精神医学的検討 —。北海道大学図書刊行会，札幌，1994.
- 26) 吉田禎吾：日本の憑きもの — 社会人類学的考察 —。中央公論社，東京，1972.
- 27) 宮本忠雄：憑依状態 — 比較文化精神医学の視点から —。臨床精神医学 8, 999-1008, 1979.
- 28) 東村輝彦：蛇憑きの2例 — その民俗精神医学的研究 —。臨床精神医学 12, 1145-1151, 1983.
- 29) 吉野裕子：蛇 — 日本の蛇信仰 —。法政大学出版局，東京，1979.
- 30) 桜井凶南男：祈禱性精神病の4例。実地医家と臨牀 16, 932-939, 1939.
- 31) 佐藤親次：憑きもの。現代精神医学体系 25. p 77, 中山書店，東京，1981.
- 32) 李 熙洙：民間信仰の關係する反応性精神病の臨床的研究。精神経誌 63, 296-310, 1961.
- 33) 石福恒雄：「窮地」としての異常体験反応の人間学的構造。精神経誌 70, 212-223, 1968.
- 34) 昼田源一郎：「窮地」と宗教体験。イマージョ 3(2), 72-79, 1992.
- 35) 井桁 碧：「主婦」の祀る先祖 — 従属する主体 —。脇本平也 他編：現代宗教学 4, 権威の構築と破壊。p 187, 東京大学出版会，東京，1992.
- 36) 茂田 優：初老期以後の心因反応 — 特にその内的準備性および症状発生の機制についての一考察 —。精神経誌 73, 717-734, 1971.